



松平家八代と家康公

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



松平太郎左衛門親氏像。松平郷園地（豊田市松平町）には、領内を巡視する親氏像と7対の石柱が1993年に建てられた。（写真提供：松平観光協会）

松平家は三河松平郷（現豊田市）を拠点として初代親氏から家康公の父・広忠まで八代を数える一族でした。この松平家八代の御墓は、豊田市松平町の高月院と岡崎市の大樹寺にあります。一族の祖は源義家の孫・義重（新田義重）で、その末子・義季が上野国世良田庄徳川郷に住んで徳川義季と名乗り、南北朝の混乱の中に衰微して、義季の子孫の八代目親氏が流浪して松平郷に至って、郷主松平太郎左衛門の娘を娶って松平氏を名乗ったというのが系図です。

松平家三代目の信光が寺に納めた願文があります。「阿弥陀佛の大慈悲力を蒙り天下泰平国家安穩を守護せしめんと欲す。之に依り子孫代々浄土の真宗に帰依し、仏神を崇敬し奉り、加護の力を以って武運を開榮し、天下の守

護職として上は叡慮を安んじ奉り、下は国家を治め万民を安んじ、普く念仏を流布し、二世の利益を施し共に大菩提を成ぜん」。小さな領主の願文としては、天下の守護職たらんというのは氣宇壮大なものがあります。

家康公の祖父・清康はなかなかの英傑で、岡崎を拠点にほぼ三河一国を平定しました。しかし彼は尾張の織田信秀（信長の父）との戦いの途中で誤って部下に殺され、岡崎勢は混乱し織田軍は岡崎に迫りました。家康公の父・広忠が十歳の時です。広忠は流浪し今川の援助のもとでようやく岡崎に帰り、その後は今川方の尖兵として尾張勢と戦うことになりました。地方武将である松平家は、東に駿河の今川、西に尾張の織田という強大な勢力に挟まれており、とても同時に二方面作戦の出来

るような力はありませんでした。

家康公が生まれたのは天文十一年（一五四二）の暮れ、岡崎城でした。母は三河の刈谷城主・水野忠政の娘・於大の方で、父が亡くなり、兄の代になって水野家が織田方に味方する方針となつたために離縁となり、松平家を去ります。家康公満一歳の時です。そして三河の国侍の多くが織田方に傾くにつれて広忠に対する今川方の不信が強くなったこともあつて、家康公は人質として駿府へ送られることになりましたが、途中で織田方に味方する勢力の手によつて逆に尾張に送られてしまいました。天文十六年、家康公六歳の時です。ここで十四歳の信長と会うことになりました。その後の二人の関係をみると、この子供時代の二人の間に出来た信頼と友情の関係は大変に深かつたのだらうと思われれます。